

日本生薬学会海外派遣助成事業
海外で開催される国際研究集会への参加〔成果報告書〕(抜粋)

(B-2)

1. 派遣者

所属 金沢医科大学 職名 研究員 氏名 高田 尊信

2. 研究集会名

(欧文名) The 4th KSP-JSP-CCTCNM Joint Symposium on Pharmacognosy

(訳文名) 第四回韓国生薬学会・日本生薬学会・中国生薬学会合同シンポジウム

3. 派遣期間 平成20年 6月 17日～平成20年 6月 22日(6日間)

4. 国際研究集会の概要とその成果 (併せて600字～800字で記載下さい。)

(概要)

大韓民国江原道江陵市において日本生薬学会・韓国生薬学会・中国生薬学会の合同シンポジウムであり、それぞれの国における生薬学・天然物化学・漢方薬学に関する研究の発表があった。

日本・韓国・中国3カ国の研究者がその研究成果を講演し、ポスドク・大学院生・学部生によるポスター発表が行われた。

(成果)

韓国は医薬品以外に、メラニン産生阻害物質のように化粧品などに応用しうる化合物の探索などを研究テーマにする大学もあった。自分の博士論文のテーマにもメラニン産生阻害物質の探索が含まれており、その遺伝子発現抑制のターゲットには、自分の研究と比較して興味深く新しい発見があった。

日本の研究では、従来の抗がん作用や抗炎症作用などを目的として生薬や薬用植物からの有効成分を単離するほか、野菜や果物からの有効成分の単離も試みられており、この点は中国や韓国よりも先んじていると考えられた。

野菜や果物などであれば、安全性については『長い食の歴史』で証明されているということができ、安全性が担保されているということは、マイルドな作用が求められる健康食品や機能性食品などを開発する上で重要であると考えられた。

中国は自国の長い伝統や歴史をもつ漢方の効力を再検証する研究などを進める一方で、抗エイズ薬、抗ガン薬、抗炎症薬などの開発を目的と研究にも力を入れていることがわかった。

また、本学会では三カ国とも、天然物由来の糖タンパク質や多糖などの天然高分子化合物の単離・構造解析についての発表は少なく、未開拓の領域を残す分野であると考えられた。

5. キーワード (本研究成果のキーワードを最大6つお書きください。)

- ① 伝統医薬 ② 化粧品 ③ 遺伝子
④ 野菜・果物 ⑤ 天然高分子化合物

6. 本会からの助成に対する意見・希望等

外国通貨で消費した滞在費の日本円への換算は、富山空港の換金時点のレート1ウォン＝0.13円によって欲しい。